

## 《研究ノート》

# ロールシャッハ・テストにおける片口法スコアリング

井手 正吾

札幌学院大学心理学部

キーワード：ロールシャッハ・テスト、片口法、スコアリング、心理診断法

## はじめに

本論文は、ロールシャッハ・テストのひとつのシステムである片口法のスコアリングについての覚え書きである。片口法の領域、決定因、内容、形態水準、その他のスコアリングについて概観し、筆者が実際に活用する際の若干の変更も示した（この変更はシステムの集計、Summary等へ影響は与えないものである）。また今後望まれるだろう変更点などについてもとりあげた。

片口法の検討のため他のシステムもとりあげているが、Klopfer法についてはKlopfer & Davidson (1942, 河合訳, 1964), Exnerの包括システムについてはExner (2003, 中村・野田監訳, 2009), Beck法についてはBeck (1949) を主な参考としている。

## ロールシャッハ・テスト、片口法

1921年に公刊されたHermann Rorschachのインクプロット検査は、10数年の沈黙ともいえる時期を経て1930年代後半には瞬く間に世界中で用いられる有用な検査となった。ご存じの通り、Rorschach, H. の公刊翌年の病死もあり (Ellenberger, 1954, 大槻訳, 1964), ロールシャッハ・テストの施行法、反応の記号化、整理分析法、その意味づけや解釈等には、Rorschach (1921, 東京ロールシャッハ研究会訳, 1964) を基盤にしながらも、いろいろと異なるバリエーションがある。

それはロールシャッハ・テストのシステムといわれるが、その中心は反応の基本的な記号化であり、これはスコアリングやコーディング等とよばれる。この記号化は、Rorschachが考案した領域、決定因、内容、形態水準、ならびにP反応が中核となっており、どのシステムにもこれら

に関する記号はあるようだ。この片口法のスコアリングについて概要し検討していく。

わが国の片口 (1956, 1960, 1974, 1987) によるシステムは、日本のロールシャッハ・テストの発展に大きく寄与してきた。片口のシステムは、片口修正 Klopfer 法などともいわれていたように、Klopfer のシステムをもとにしているところが大きい。片口は一貫して『心理診断法』と題しているが、1956年の「心理診断法」に始まった。これはKlopfer法のスコアリングをそのまま取り入れているところが大きい。次に1960年の「心理診断法・詳説」で片口法はほぼ完成したといわれ、Klopfer法のスコアリングがかなり整理され、修正BRSが導入されている。さらに、「新・心理診断法」(1974)、「改訂 新・心理診断法」(1987)と更新が重ねられた。「新・心理診断法」では形態水準がすべての反応に適応される等の修正がみられ、また「改訂 新・心理診断法」では、P 反応の修正、Cpの導入などの変更がある。なお、1970年には、Ka-Ro Inkblot Testのマニュアルを出しており、これは「新・心理診断法」につながっている。

氏原(2005)は、片口法について次のように述べている。「ロールシャッハの由来から始まって、施行法、解釈仮説など内外の文献を網羅して概括的に、かつ独自の見解も加えて緻密な説明がなされている。これ一冊でロールシャッハ・テストについて必要な知識は十分」である。このように、『心理診断法』にはロールシャッハの百科事典的なところがあり、地道な更新がなされてきた。

## スコアリング

片口法のスコアリングについて、領域、決定因、内容、形態水準、その他の順にみていく。基本的には最新の片口 (1987) によるものである。

### 領域

領域はRorschach当初から、全体 (W)、普通部分 (D)、特殊部分 (Dd)、空白 (S) という4つの主要分類がある。片口法はKlopfer法を受け継ぎ、個々の実際的なスコアリングとしては、全体は、W、Wc (切断全体)、DW (作話的全体)、普通部分は、D (大部分)、d (小部分)、特殊部分はdd (微細)、de (外縁)、di (内部)、dr (特殊区分)、ならびにSを合わせて10のスコア (記号) を用いることになっている。Wcは、Klopferより限定的なものとなっており分かりやすくなっている (表1に領域のスコアリングを示す)。

領域に関して修正点や留意点として指摘されるところをあげておく。Rorschachから用いられるDWは必要なものか、やはりRorschachが用いていたDoと同じようにルーティンのスコアリングではなくして、継起分析等で細かな検討で利用すればよいのかもしれない。dd、de、diの定義は少し複雑なところもあり片口法ではやや説明不足かもしれない。このスコアを用いるならば、Klopferを参考にするとよい。

普通部分に関しては、Dやdをあわせた領域の場合、大半Dやdになるが、時にdrとなるとなっ

ており、このあたり迷うこともあり、より明確にした方がよいように考えられる。IXカード、中央上部の薄い領域 (ExnerのD8) は片口法に厳密に従えば、Sとなる場所である。筆者はこのような場合、薄い色を認識されていることが多く、その時はDとスコアしている。片口法の普通部分領域指定図は1958年のデータである阪大法のものを用いているが、意外に大きな問題を感じるものではない。しかしIXカードの領域も含めて最新のデータによる更新も望まれるところであろう。

### 決定因

決定因はRorschachが最も重視したものでもあり、さまざまなかまかな議論があるが、詳しくはここでとりあげられない。決定因は大きく分けると、形態、運動、色彩 (有彩色)、無彩色、陰影とされることが多い (表2に決定因のスコアリングを示す。破線右は筆者の用いているスコアリングである)。

形態反応Fは、形態的要素のみを用いた反応である。他の決定因がみられない除外的なスコアともいえるだろう。Fが主分類 (メインの決定因) となると、基本的には副分類 (アディショナル) はつかないし、Fが副分類となることはない。しかし、特殊な場合も指摘されるところである (馬場, 2017)。

運動反応は、M (人間運動反応)、FM (動物運動反応)、m (無生物運動反応) があり、無生物運動反応はFm, mF, mが実際のスコアとなっている。MやFMでは、はっきりしない姿勢的な運動をスコアするか、副分類にするか、等が問題とされることが多い。片口は副MやM傾向などと細かく、ある意味煩雑に規定しているが、筆者は最終的な被検者の反応により、姿勢としてみられているならMやFMとしている。動物の擬人的な運動についても、微妙な反応がありMなのか、FMなのか問題となることも多い。mについては、片口法にしたがうと副分類はmのみでよいとなっているが、筆者は、かえって混乱しやすいので、副分類もFm, mF, mとしており、これは慶応グループ (馬場, 2017) もそうしている。

色彩 (有彩色) 反応Cは、片口法は煩雑ともいわれるKlopper法のスコアリングを整理し、簡略化しているが、なお煩雑に思われる。Csymなどは、かえって分かりにくくなっている (厳密には「FC, Csym」, 「CF, Csym」, 「Csym」とスコアすべきものであろう。片口 (1987) のp83の注釈参照)。

片口法に厳密に従うと色彩反応は、FC, F/C, CF, C/F, C, Cn, Csymの7スコアを使うこととなるが、筆者はFC, CF, C, Cnだけを用いている。Cn (色彩命名) はRorschachから用いられているものであえてルーティンのスコアとしなくてもよいのかもしれない。強制的や任意的

表1. 領域スコアリング一覧

W	}	W
Wc		
DW		
D	}	D
d		
dd	}	Dd
de		
di		
dr		
S		S

註) Wc (切断全体反応) は、本来1文字表記の特殊な記号であるが、PC等での入力も考慮しWcとしている。

な色彩の反応 (F/C, C/F) や象徴的な色彩反応 (Csym) は、継起分析における細かな検討時に用いばよいのではないかと考えている。

片口(1984)では、ルーティンのスコアとして、色彩投影反応Cpをいれている。CpはPiotrowskiによるスコアであり、臨床的には少なからず見られ、何らかの意味をもつ反応として知られている。しかしExnerが特殊スコアCPとしているように、決定因、ルーティンのスコアとしていいものか、まだまだ検討が必要であろう。筆者は、やはり継起分析等で検討すべきスコアとしている。

無彩色C'は、FC', CF', C'となっている。無彩色反応も、かなり特殊な反応ながら色彩反応のような細かな(煩雑な)スコアに該当する反応はあるが、特に大きな問題となっていない。それは、色彩反応をルーティンのスコアにはFC, CF, Cとしても十分であろうということをサポートするものであろう。Ⅷ, Ⅸ, Xの彩色図版のくすんだ領域を、被検者が無彩色として認知して反応を出している時は、C'にするようにしている。これは他のシステムでも同様と思われる。

濃淡反応は、大きく分けると材質、通景、拡散にわけるのが適切であろう。Beck法とKlopper法を比べるとBeck法の方が整理され理解しやすい。Klopperの弱立体反応kは、片口(1974)まではあったが現在は使用されていない。筆者の臨床経験でも、これをスコアする臨床的な意味合いはあまりないように感じている。

濃淡反応として、まず材質反応cがある。個々の実際的なスコアとしてはFc, cF, cとなっている。これは、Beck法はTを用いているが、基本的には共通するところである。あくまで、濃淡、陰影が材質感につながらなければスコアできない。材質感というのはtextureであり、「ふわふわ」や「ごわごわ」等の手触りの感覚が強調されるが、「ツルツル」や「しわ」などの表面の性質、肌理も含まれることも頭に入れておかねばならない。

片口法、Klopper法の通景FKと拡散Kは分かりにくいし、理解しにくいようだ。片口は「改訂新・心理診断法」(1984)でも、通景反応としてまとめて説明しているのも問題かもしれない。Beck法は、通景をVで、実際的なスコアとしてFV, VF, V, 拡散はYとしており、FY, YF, Yとしている。Exner法はこれを採用している。

通景はFKであり、立体感、奥行き感、通景感が反応にみられると、すべて形態関与の程度に関係なくFKとスコアされる。これは、陰影が関連しなくても、IVカードの巨人を下から見上げているやVカードの草むらから首を出したウサギ等の形態による通景感も含まれる。また、鏡映の反応もFKとスコアされる。これは、Beck法もKlopper法も同様なようである。Exner法は、これを整理して、濃淡による通景感V、形態による奥行き感をFD、鏡映の反応はr (Fr, rF)としている。

拡散反応は、KでKF, Kからなるといってよいだろう。片口は、陰影を明言しなくてもKをスコアしてよいとしており、やや曖昧な印象はある。通景と拡散がKというスコアを用いているため、他のmやC等とFとの組み合わせが異なるため、形態関与の度合いによっては、Fを主決定因でKFやKが副決定因となることもある。Exner法はYを、幅広く、材質、通景以外に陰影

が関係していると思われる反応についてのスコアとしているようだが、やや疑問を感じるところである。

陰影反応については、筆者は一時的にExner法のスコアを取り入れていたが、教育的な立場が大きくなったこともあり、現在は片口に準拠して用いている。継起分析的には、Exner法におきかえたり、FK (Sh), FK (FD), FK (r) 等を用いて検討しているが、今後の片口法の発展のためには、陰影については、もう少し整理が必要であろう。

**内容**

内容のスコアリングは、Rorschachが重視した人間反応Hと動物反応Aを除くと、システムによって異なるところが大きい(表3に内容のスコアリングを示す。破線右は筆者の用いているスコアリングである)。

人間反応Hと動物反応Aは、全体か部分か、現実的か非現実的かというところで、人間ではH, (H), Hd,

(Hd), 動物ではA, (A), Ad, (Ad) となっている。これは共通するところであるが、現実的か非現実的なのか、すなわち ( ) がつくかつかないか、また非現実的な生物で、人間なのか、動物なのかを明確にしにくい反応は少なくない。

片口法は、人間関連で、解剖反応Atがあるが、下位スコアとしてAts, Atb, X-ray, A-Atがあり、片口法に厳密に従うとこれをスコアすることになる。この分類でX-rayはCTやMRIなどの反応を含めて何らかの解釈的意味があるように思われるが、この下位分類に大きな臨床的意義はないように思われ、筆者はAtのみのスコアを用いている。人間・動物関係では、他に性Sex 肛門Anal 動物製品Aobjがある。Aobjは、IVカードやVIカードでの毛皮、敷物などのためのスコアとして使われるが、(A) や (Ad) とスコアしてよいと思われる。Analは性的な意味合いをもった反応の場合、Sexにまとめてよいように思われる。また、植物反応Plの下位スコアとってよ

表2. 決定因スコアリング一覧

F			F	
M			M	
FM			FM	
Fm	}	m	Fm	
mF			mF	
m			m	
FC			} FC	FC
F/C				} C
CF	CF			
C/F	C			
C	C			
Cn	Cn			
Csym				
FC'	}	C'	FC'	
C'F			C'F	
C'			C'	
Fc	}	c	Fc	
cF			cF	
c			c	
FK		FK	FK	
KF	}	K	KF	
K			K	
FCp	}	Cp		
CpF				
Cp				

い花反応Pl. fは、片口 (1984) で唐突に新たなスコアとして取り入れられている。この分類も大きな臨床的意義はないように思われ、筆者はPl. fを使っていない。

その他の内容としては、自然Na, 物体Obj, 建物Arch, 地図Map, 風景Lds, 芸術Art, 抽象Abst, そして、血液Bl, 雲煙Cl, 火Fire, 爆発Expl, 食物Food, 楽器Musicがある。ロールシャッハでみられる反応は、さまざまであり、これらに該当しない反応はスコアを作るようになっている。

該当しないもので、よく見られるものとして、飛行機, 船, バイクなどの乗物の反応がある。筆者は、これらを高橋・北村 (1981) やBeck (1949) にある乗物反応Travel, Trというスコアを使っている。

また、服や靴, リボンなどは、片口法に厳密に従えばObjとなるが、このような衣服や装飾品は、他の物質Objとは異なる臨床的意義が認められており、筆者は衣服Cgというスコアを使っている。これはExnerのシステムにもあるが、システムを問わずに意外に多くの人が用いている。逆に、VIカードの弦楽器などはMusicとスコアされるが、この分類にあまり大きな臨床的な意義はないようであり、物質Objにまとめている。

Trを加え、CgをObjから分離し、Musicをなくした内容スコアで意外に大半の反応はスコア可能である。文字, ハートのマーク, 記号, などはArtとしてよいだろうし、明かり, 光などはFire, 汗などはBlとしており、原語の意味合いからいうと大きな間違いではないだろう。

確かにロールシャッハの反応はいろいろな内容の反応が出てくるだろうが、その特殊な反応を

表3. 内容スコアリング一覧

H (H) Hd (Hd)	}	H	H (H) Hd (Hd)
A (A) Ad (Ad)	}	A	A (A) Ad (Ad)
Ats Atb X-ray A.At	}	At	At  A.At
Sex Anal Aobj			Sex Anal Aobj
Pl.f Pl Na			Pl  Na
Obj Music			Obj
Arch			Cg Arch Travel (Tr)
Map Lds Art Abst			Map Lds Art Abst
Cl Fire Expl Food			Cl Fire Expl Food

重視しスコアを考え増やすことが心理診断として重要なことなのか疑問を感じる。それこそ、継起分析で、その反応内容の独自性を検討すればよいように思われる。Exner法や慶応グループのように、「その他」という分類としてIdやOther等を作った方がよいのかもしれない。

## 形態水準

形態水準, 形態質の評定はロールシャッハ・テストの結果の分析解釈には非常に重要となるが, 同時に片口が1956年より述べているように多くの困難で複雑な問題を含んでいる。片口法の形態水準のスコアリングは, Beck法やExner法のリスト法といった統計的基準を基盤にするものではなく, Klopfer法の-2.0~5.0に評定するような, 反応の正確さ, 明細化, 結合性などを総合的に検討して評定するのであり, 主観的評定ともいわれよう。

形態水準として片口法は4段階で, +, +-, -, -+となっている(表4に形態水準のスコアリングを示す。破線右は筆者の用いているスコアリングである)。Klopfer法の形態水準評定を参考にしながら, 簡易にできるよう工夫した結果となっている。1960年までは一次形態反応だけにスコアすることとしていたが, 1974年からは, すべての反応にスコアすることになっている。花や炎などのCFやmFなどとスコアされる不定形態の反応は基本的に-+になるし, 形態がまったく考えられていないCやmなどの非形態反応は基本的には-となる。

Exner法も4段階の形態水準のスコアとなっているが, +のスコアはかなり主観的な評定となっている。包括システムの発展的システムのR-PAS (Meyer, Viglione, Mihura, Erard & Erdberg, 2011, 高橋監訳, 2014) や高橋・高橋・西尾(2006)は, +の評定はo(良好形態, 片口法の+-)との境界が分かりにくいいため使っていない。片口法に準拠している慶応グループ(馬場, 2017)でも, やはり+の評定は用いていない。筆者も+の評定は用いていない。形態水準・形態質の優秀さは, やはり継起分析などの個々の詳細な検討の時に考えるとよいだろう。

## その他

P反応は形態水準の基盤となるものでもあり片口(1974)で修正されており13反応となっている。IIカードやVIIカードの四足獣は頭部がどこにあってもよいのか, VIIIカードの四足獣はトカゲ, は虫類等も含めるのか否か, 等細かな検討点はある。また, (P)はHやAが(H)や(A)になった時に該当するのであろうが, VIIカードのP反応の一部のHdでも(P)にしてよいのか等, 曖昧なところがある。

また, 片口法はKlopfer法の傾向反応などとして矢印記号"→"や括弧"}" "}"を用いて反応の経

表4. 形態水準スコアリング一覧

+	} +		
+-			+-
-+			-+
-			-

註) +- (プラスマイナス), -+ (マイナスプラス)は, 本来1文字表記の記号であるが, PC等で入力も考慮し+-, -+の表記にしている。

過をスコアリングで示そうとする点を中途半端に引きずっている印象がある。丁寧に細かく検討するためには意義あることと思われるが、これもやはり継起分析的な検討で行えばよいのではなからうか。これは特にロールシャッハの初学者にとっては煩雑で分かりにくくしているように思われる。基本的なスコアリングは、検査者との関わりが大きい質疑段階も終えての被検者の最終的な反応を対象とするのがロールシャッハとして適切ではないかと筆者は考えている。

スコアリングの結果はSummary Scoring Tableでまとめられる。片口法の活用者はそこまでは誰しもやるだろうが、是非とも修正BRSも行って欲しい。修正BRSは、本論で取り上げたスコアリングで大半は処理でき、その解釈に役に立つ。また、そこにある逸脱言語表現(作話反応・混交反応など)やDysphoric等の特殊スコアは、継起分析などを行っていく上での理解を助け深めることにもつながるだろう。

## 『心理診断法』, まとめとして

『心理診断法』と題されて展開してきた片口のロールシャッハ・テストのシステムは、ある意味かなり古いシステムかもしれない。いろいろと批判されるところもありKlopfers法の煩雑さや曖昧さを引きずっていたり、不明確であったり不備な点などの問題もあるかもしれない。しかし、日本のロールシャッハ・テストの発展に大きく寄与し、まだまだ活用もされている。片口法を活用している多くの人々はExner法などの最近の知見なども取り入れながら活用しているのだろうが、それだけロールシャッハ・テストの根幹となるところをおさえているように思われる。私的な印象ではあるが、片口法からロールシャッハ・テストを学んでいくと、他のシステムに移行したり、他のシステムの知見などを取り入れやすいように思われる。

ロールシャッハ・テスト(MMPIもそうであろうが)は、適切な臨床診断につながるための、患者やクライアントの全体で総合的な精神的心理的状态の理解のためのものである。そして、それは診断と表裏一体となっているべき治療や援助のための示唆を与えるものでもある。そのような臨床的なツールとしてRorschach自身が作成したものであろう。人間の精神、またその病理といったものは簡単なものではなく、複雑で分かりにくいところも多い。そのため、精神医学大系や精神病理的診断も更新されていっており、現在主流であるDSMが今後も継続していくかは分からない。そのような人間の精神を理解するためのツールとしてのロールシャッハ・テストに、さまざまなシステムがあり、完全に統一された整理法や解釈法がないのは、問題点や欠点また短所といったものではなく、逆にすぐれた面なのかもしれない。ロールシャッハ・テストの反応は人間の精神の分かりにくいところをとらえており、まだまだ発展・展開して、そのようなところを少しでもハッキリさせていく可能性を十分に秘めているかもしれない。

100年前にRorschachが残した10枚の図版とそれを使った検査は、まだまだ人間の心理、精神を理解していくために役立つツールとなりそうである。そのためのひとつとして、片口法の発展



ものぞまれるだろう。片口法を用いた論文には片口修正クローパー法と書かれたものが多く、さらに片口法に準拠していると書かれることも多い。多少の修正や変更柔軟で寛容なシステムでもあるのかもしれない。慶応グループ(馬場, 2017)が比較的、詳細に片口法の問題点や修正、変更を記述している。もっと総合的・全体的に片口法を展開させ、『心理診断法』に並ぶ、あるいは越えるテキスト=システムの登場を待ち望むところである。それはExnerのシステムなども取り入れたものとなってもよいだろう。片口法に限らず、心理臨床に密接にむすびついているといえるロールシャッハ・テストへの模索、試行錯誤は継続して欲しいところである。

## 謝辞

すでに故人となった片口安史先生、空井健三先生、秋山俊夫先生にあらためて感謝の意を表します。先生方のおかげで、心理臨床の路を歩みだし、ロールシャッハやMMPIを学べ、心理臨床の経験は拡がり、自分なりのまとまりをえました。また、心理臨床にからんだ大学教員を務め、多くの後輩にある程度の教えをなすことができたことも、先生方からの教えと支えによるところが大きいところです。

また、札幌学院大学大学院臨床心理学研究科の修了生を始めとする心理臨床の後輩諸氏や心理臨床センター室員などの関係者に感謝するところでもあります。そして何よりも、病院、心理臨床センターなどにおいて検査や面接で関わった患者やクライアントに、いろいろな臨床的教えを頂いたことに深く感謝します。

## 文献

- 馬場禮子(編著)(2017)力動的心理査定 ロールシャッハ法の継起分析を中心に 岩崎学術出版社
- Beck, S. J. (1949) Rorschach's test I : Basic Process (2nd ed.) New York, Grune & Stratton.
- Ellenberger, H. (1954) The life and work of Hermann Rorschach. Bull. Menmoger Clinic, 18, 5. (ロールシャッハ, H. 大槻健二(訳)(1964)ヘルマン・ロールシャッハの生涯と業績 In 東京口研訳 ロールシャッハ, H. 精神診断学 235-278. 牧書房)
- Exner, J. E. (2003) The Rorschach : a comprehensive system, vol.1 Basic foundations and principles of interpretation (4th ed.) John Wiley & Sons (エクスナー, J. E. 中村紀子・野田昌道(監訳)(2009)ロールシャッハ・テスト : 包括システムの基礎と解釈の原理 金剛出版)
- 片口安史 (1956) 心理診断法—ロールシャッハテスト 牧書店
- 片口安史 (1960) 心理診断法詳説—ロールシャッハテスト 牧書店
- Kataguchi, Y. et al. (1970) Psychopsy : Manual for Ka-Ro Inkblot Test 金子書房
- 片口安史 (1974) 新・心理診断法—ロールシャッハテストの解説と研究 金子書房
- 片口安史 (1987) 改訂版 新・心理診断法 金子書房
- Klopfcr, B. & Davidson, H. H. (1942) The Rorschach Technique—An Introductory Manual—, Harcourt, Brace & World Inc. (クローパー, B.・デイビッドソン, H. H. 河合隼雄(訳)(1964)ロールシャッハ・テクニック入門 ダイヤモンド社)
- Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J.L., Erard, R. E. & Erdberg, P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System : Administration, Coding, Interpretation, and Technical Manual*. English Agency Ltd. (メイヤー, G. J.・ピグリオン, D. J.・ミウラ, J. L.・エラード, R. E.・エルドバーグ, P. 高橋依子(監訳)(2014). ロールシャッハ・

- アセスメント・システム 実施, コーディング, 解釈の手引き 金剛出版)
- 高橋雅春・北村依子 (1981) ロールシャッハ診断法 I サイエンス社
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2006) ロールシャッハ・テスト実施法 金剛出版
- Rorschach (1921) Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments. Bern : Erunst Bircher (ロールシャッハ, H. 東京ロールシャッハ研究会 (訳) (1962) 精神診断学—知覚診断的実験の方法と結果 牧書房)
- 氏原寛 (2005) ロールシャッハ・テストとTATの解釈読本—臨床的理解を深めるために— 培風館

## Note of Kataguchi's Rorschach Scoring System

Seigo IDE

(いで せいご 札幌学院大学心理学部 臨床心理学科)

